



いやす  
なおす  
たもつ



文書館資料にみる  
病気・医療・健康

19

(左)「薬袋」(佐川家文書〔大島町〕653)、(右)「亀田すいだし膏薬」(亀田家文書 101・102)

医学あれこれ①

## 神話と「貝」 ～「貝明神（貝明神）」と薬の容器

日本の神話には、貝を擬人化した女神が登場します。

『古事記』では「蜃貝比売」・「蛤貝比売」、『出雲国風土記』では「支佐加比売」・「宇武賀比売」と表記され、それぞれキサガイヒメ（キサカヒメ）、ウムギヒメ（ウムカヒメ）と読み、赤貝と蛤（ハマグリ）を擬人化しているようです。

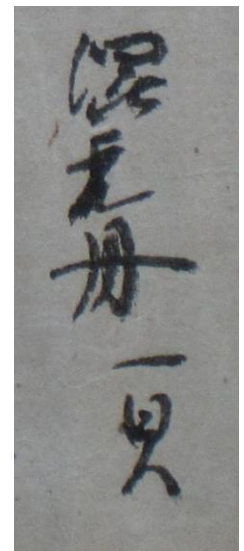
神話では、兄神たちである八十（やそ）神から嫉まれた大国主神が、八十神が猪と偽って山上より転がした焼岩を抱き止めて焼け死んだところへ、神産巢日之命（かみむすびのみこと）が娘のキサガイヒメ・ウムギヒメを派遣し、治療を施すと、大国主神は蘇生したとあります。国つ神の代表格である大国主は、「貝」の力によって再生したのです（貝には実際に薬効があるそうです）。

この神話と関連があると思われるが、山口市徳地堀の出雲神社（周防二の宮）の末社に「貝明神」があり

ます（裏面①）。蜃貝比売・蛤貝比売ほか一神を祭っており、その社伝には、疱瘡の守護神であり、永禄年までは社格をもっていたが、のち本社に遷したこと、藩主宗広公・斉房公の疱瘡の加持祈祷をおこなったこと等を記しています（「防長風土注進案」）。

「貝明神」は、記録上 2 箇所（柳井市柳井の代田八幡宮・同市遠崎の松堂八幡宮）で確認でき、代田八幡宮のものは、「右地主ノ神八、今社ノ堺（境）内、左腋二長三尺計ノ石アリ。即貝明神ト唱テ、疱瘡守護ノ神也」（「玖珂郡志」）として現存しています（裏面②）。

貝、とくにハマグリは古来膏薬等の容器として使われ、当館にもいくつかの資料があります（写真上・右）が、そこには、容器としての貝の有用性のほかに、以上のような「病を癒やす」実際の薬効や歴史的・神話的な背景があるのかもしれない。



「混元丹 一貝」

混元丹は、多くの薬効をもつとしていま話題の「プラセンタ」（胎盤由来の医薬品）です。すでに戦国時代には贈り物として、貝に詰めて運ばれていたことがわかります。（浦家文書巻 1「杉弘相書状」）

（解説シート 13 参照）

# 貝明神（貝明神）

## ①徳地 出雲神社の「貝明神」

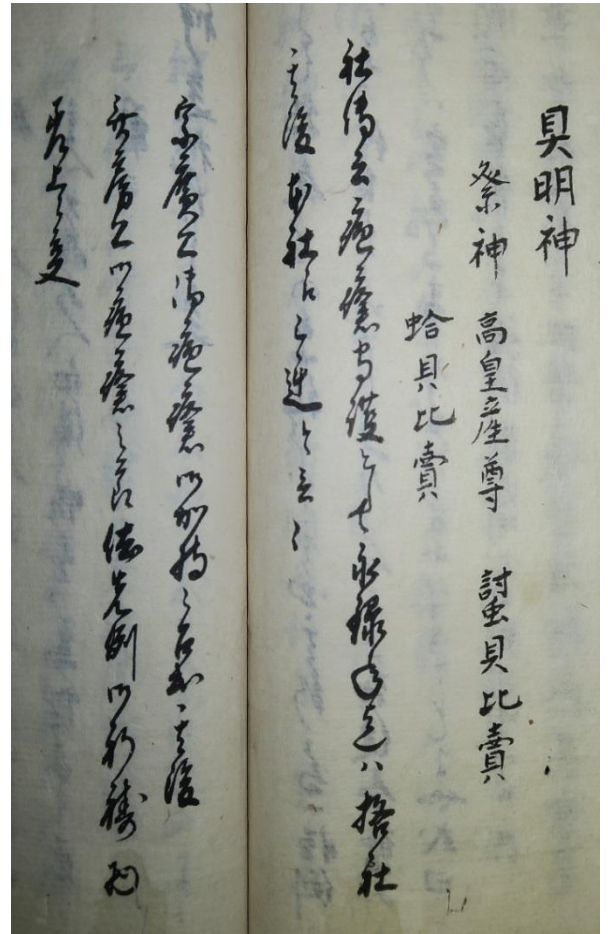
貝明神\*  
祭神 高皇産尊 蜃貝比売  
蛤貝比売

社伝云 疱瘡守護として永禄年迄八格社  
其後本社江被遷と云々

宗広公御疱瘡御加持被召出 其後  
斉房公御疱瘡之節依先例御祈禱物  
差上候事

（「防長風土注進案」徳地宰判堀村 二宮出雲神社の項）

\*「貝明神」は「貝明神」の誤記かとも思われますが、「防長風土注進案」より百年ほど古い「寺社由来」にも「貝明神」とあります。徳地の出雲神社は周防二宮でしたが、周防三宮の仁壁神社（山口市宮野）の境内にも「貝明神」が現存します（ただし祭神は違います）。いつの時点かで徳地出雲神社の「貝明神」が「貝明神」と誤伝され、それが仁壁神社にも勧請されたのかもしれませんが、即断は避けておきます。



## ②柳井 代田八幡宮の「貝明神」



貝明神（地主神） （旧）鷲神社 生目神社



柳井市代田八幡宮境内の末社。

- \* 向かって左が疱瘡神である「貝明神」（地主神）。「玖珂郡志」の記述どおり、3尺ほどの石が立っています（左写真）。
- \* 中央はかつて「鷲社」とよばれ、岩国領に数多く勧請された、これまた疱瘡の神です。各地の大歳神社を合祀して、いまは大歳神社と称されています。
- \* さらに、右は「生目神社」という眼病の神です（解説シート7参照）。かつては疱瘡をはじめとする疫病や衛生環境等によって、視力を失った人が数多くありました。